

題目 集団の中にいると情動は伝染しやすくなるのか？

—表情模倣を用いた実験的検討—

氏名 井寺晃洋

指導教員 高橋伸幸

私たち人間は、一緒に過ごしている友人の笑いや興奮が無意識に自分にも伝染して、友人と同じ気持ちになることがある。他者の情動が無意識に自分にも移る現象は情動伝染と呼ばれている。私たちはこの情動伝染を通して他者と円滑なコミュニケーションを行っている。では、情動伝染はどのようになされるのだろうか。人間が他者の感情をどのように理解するのかを記述する理論として、**Embodied cognition theory** が挙げられる。**Embodied cognition theory** とは、人の認知は身体に依存することによって行われるという考え方である。これに基づく仮説によると、人は他者の感情を理解する際、観察した感情を自分の身体でシミュレートするプロセスがある(Niedenthal, 2007)。シミュレートの代表的なものとして「表情模倣」が挙げられる。表情模倣とは、他者が何らかの感情を表出した表情を観察したときに、反射的・無意識的に同じ表情を表出する現象である (Dimberg, 1982)。Niedenthal によると、表情模倣(シミュレート)をすることによってより正確に他者感情を理解することができるとしている。これまでに多くの表情模倣研究が行われ、様々な感情が伝染するとされてきたが、そのほとんどは二者間での実験であった。情動伝染は人から人へと伝わるメカニズムであることを考えると、もし複数の参加者が同時に同じ表情刺激を受け取れば、お互いの情動が伝染し合ってより明確な情動として伝染するのではないだろうか。そして、情動がお互いに伝染し合うのであれば、人の感情を理解するためになされる表情模倣の程度もより増幅されると考えられる。そのためには、それぞれの参加者が相互に情動を伝染し合うプロセスにおいて、お互いがどのような様子でいるのかを認識できる状況である必要があるだろう。本研究では個人条件、4人の間に衝立がある衝立あり集団条件、4人の間に何も無い衝立無し集団条件の3条件を設定し、条件間で表情模倣の程度及び感情認識の程度に差が見られるか、そして表情模倣と感情認識に相関が見られるか否かを検討するため、実験を行った。実験では、映画の一部を切り取った動画を刺激として用いた。その結果、表情模倣・感情認識共にほとんどの感情において条件差は見られなかった。この結果から、集団の中にいることで表情模倣の程度がより大きくなるということは示されなかったが、実験状況や刺激などに課題点が見られたため、それらを改善した上でさらなる検討が必要であると思われる。